

はじめに

本書は「国際日本研究」をテーマに研究、活動が続けてきた東京外国語大学国際日本研究センターの研究の成果であり、私たちが考える「国際日本研究」を提案するものです。

「国際日本研究」というのは、日本を研究する際、日本の中で閉じたものとして研究するのではなく、広く外からの視点、海外との対照を通じて見えてくる日本の姿を研究しようというものです。海外に行くとは日本との違いを感じる人が多いでしょう。そして、自分自身が暮らしている日本のことを、よく知らなかったことに気づかされるのではないかと思います。現在のように、海外に行かなくてもITを利用して海外の人と交流したり、国内に増えている外国籍の人と接したりする機会が多い中で、思いもよらない質問を受けたり、不思議な感想をもらったりすることがあると思います。実際、海外での日本研究では日本国内ではあまり見ないテーマも多く、驚かされることがあります。本書はそのような視点で日本のいろいろな面を考え、その疑問に答える形で日本を紹介しようとするものです。

海外と接するとき、まず関門になるのが言葉です。相手の言葉で交流するにしろ、日本語で日本語を勉強している人と話すにしろ、母語である日本語と他の言語との違いを目にすることになり、日本語とはどのような言葉なのかと考える機会があると思います。第1章ではその疑問に答えるためのヒントが

書かれています。言葉とはどういうものか、日本語を通して見てみます。また、日本語母語話者にとつてはあまりにも当たり前のことでも海外の人が見ると奇異に思うようなものもあります。この章を読んで、特に何も考えずに使っている言葉のしくみ、どれほど複雑な使い方をしているのか、ということにも思いをめぐらせてほしいと思います。

第2章は言語の芸術と言える文学についてです。海外の人に日本の文学を紹介するとき、役に立つでしょう。また、日本の文学といっても今は言葉の壁は低くなっており、「俳句」や村上春樹は全世界の人を読者に行っています。「Haiku」を作る人もいます。また、日本の文学といっても海外の文学からの影響や相互の交流があることもわかります。この章では同時に、文学を評論することの面白さも知ることができると思います。

第3章は文化です。今や日本を発信する一番の手段である文化、さらにサブカルチャーについても考えます。文学同様、伝統文化も日本人だけのものではありません。また、特に海外でも人気の高いアニメについては海外の研究者からの要望があつて取り上げています。よく知っている宮崎アニメを分析してみましよう。そして、言葉の壁を越えるために必要なこと、文化としての翻訳についても考えてみます。

自分自身が使っている言葉、興味のある文学、文化といった自分自身の関心を考えるテーマが多かつた前半に対して、後半の三つの章では、私たちの生活をめぐる日本社会のあり方について考えていきます。第4章も言葉に関することですが、言葉そのものより、社会における言葉の位置について考えていきます。日本での言葉というと、日本語、標準語が確固たるものとして存在します。日本語、標準語が

どのようにしてその位置を築いていったか、それはいったい何を疎外してきたのかについて考えます。標準語としての日本語（＝国語）の成り立ち、その影で疎外され、迫害されている少数者の言葉、具体的には方言、少数民族語、そして障害者の言葉について扱っています。最近議論の多いマイノリティを考えるひとつのきっかけになるでしょう。また、日本語を外国語として学ぶ人たちのことについても触れています。

第5章は海外の人の関心が高く、よく聞かれるテーマを扱っています。天皇制、宗教、憲法などは日本人にとってもよくわからないことが多く、聞かれて困ったという経験のある人もいるのではないのでしょうか。しかし、「国際日本研究」では避けて通れない問題です。この章ではこれらのテーマの問題点が整理されており、それを考えるためのヒントが書かれています。本書の中で一番難しいテーマを扱っていますが、大事な問題ばかりです。じっくり読んでいただきたいと思います。

第6章では一転して身の回りの日本社会について考えます。教育格差、食糧問題、災害とその後の生活、会社文化、そしてジェンダーと私たちを取り巻く毎日の生活の中にある問題です。あまりに日常的で、問題があることを意識しながらも通り過ぎていつてしまっていることについても取り上げて、振り返ります。このような日常的な問題はどの国にも存在することで、海外との違いも考えてみたいところです。日本に関するテーマをたどりなおして最後に現在の自分の置かれた状況を改めて考え直すことで終わります。

そして、本書の隠れたテーマは歴史です。学校で習う歴史ではなく、現在の日本のもとなっているもの、現在の日本を成り立たせるにいたった経緯である歴史です。本書では、古代から現在まで、特に

現代日本の基礎を作ったと言える明治時代、そして高度経済成長やバブル崩壊を経た現在の日本にいたる歩みを取り上げられています。明治時代に關しても違った角度から取り上げること、何が現在にながっているのかを見ることが出来ます。同じ時代のことをいろいろな観点から見ること、総合的にその時代を眺めることができ、そして現代に続く問題も見えてきます。いろいろなテーマがあるからこそ見えるものがあります。そして、興味のあるテーマについてはさらに考えを深めるためにそれぞれの本文に「読書ガイド」がついています。参考文献の中で手に入りやすいもの、初学者向けのものを紹介していますので、ぜひ読んでいただきたいと思っています。

本書で扱っているテーマは広く、多岐にわたっているため、統一感がないと思われるかもしれませんが、これこそが現在の日本の姿ではないかと思っています。さまざまな角度から眺めることで現在の日本が見えてきます。現在の日本を見るために必要な視点、テーマを集めたら「29」になった、とも言えます。本書を通して、自分の置かれている現在を改めて見直していただきたいと思っています。それが、私たちの提案する「国際日本研究」なのです。

*

なお、本書は二〇一六年に出版した『日本をたどりなす29の方法―国際日本研究入門』（以下『29の方法』）の姉妹編です。『29の方法』は東京外国語大学国際日本研究センターが作成した「国際日本研究」の入門書であり、日本研究、日本語学習のための教科書です。本書は、『29の方法』の企画の際の教科書

としての二〇〇〇字、という長さでは書ききれなかった内容や、テーマを少し深く掘り下げた内容の、もう少し分量の多い読み物で、この教科書を読む若い日本語母語話者、この教科書を勉強してさらに深めたいと考える日本語学習者、そして、海外で教える方々のために、本文を解説したものが必要だという考えから執筆されました。そのために、本文には充実した注をつけました。本書は『29の方法』と同じテーマ、筆者による（一部違う筆者のものもあります）、「29」のテーマを集めたものです。本書と併せて『29の方法』も手に取っていただければと思います。

二〇二二年一月二六日

編者